

8 小豆島イチゴ栽培の維持発展に向けて

■ 小豆島いちご部会 ■

(小豆農業改良普及センター 渡辺二郎)

● 対象の概要

小豆島いちご部会は小豆郡全域におけるイチゴの生産部会で、現在、生産者は31戸で栽培面積は4.15haとなっている。

当部会は、相互扶助意識が高く、部会員の結びつきも強い。生産にあたっては夫婦や親子での助け合いによる栽培管理を行っている生産者が多い。

また、比較的若手が多く、40代以下が9名を占めているが、同時に70代以上も7名おり、後継者不足に悩む生産者もある。

そのほか、高額なハウス建設費などのため初期投資が障壁となって新規参入が困難な状況となっている。

● 課題を取り上げた理由

昭和61年に土庄町大鐸地区において、「宝交早生」が導入され、小豆島のイチゴ栽培が始まった。翌年から「女峰」へ転換し、その後、順調に生産者数、栽培面積とも伸び続け、平成7年にいちご部会が発足した。翌8年にはらくちん栽培の導入が始まり、現在は全ての生産者がらくちん栽培となっている。

生産戸数、面積ともに伸び続け、最大時には35名で5.14haとなっていたが、近年は高齢によって栽培を取りやめるなどにより、平成28年1月現在生産者31名、栽培面積4.15haである。

平成27年度は栽培開始から30周年を迎えたことから、これまでの栽培を普及活動の経過及び今後の産地維持発展についてとりまとめた。

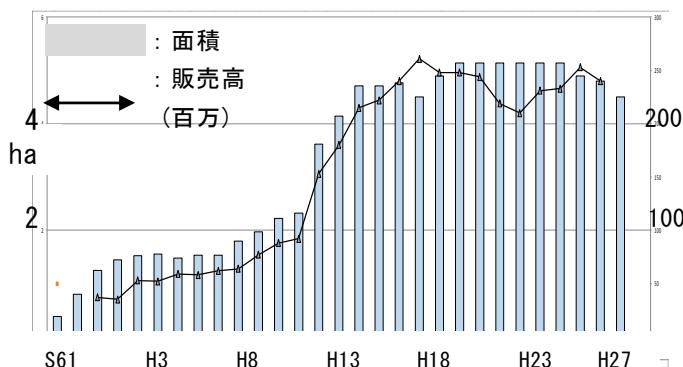


図-1 栽培面積・販売高の推移

● 普及指導活動の経過

1 「女峰」への品種転換

昭和61年の栽培開始時には、当時の県内主力品種であった「宝交早生」で栽培が開始されたが、離島という立地条件から果実硬度が低く、輸送性が問題であった。

そこで、「宝交早生」に比べ果実硬度が高いことに加え、花芽分化が早く長期促成栽培に適した「女峰」を導入することになった。導入初年度から全員が「女峰」に転換し、現在も小豆



島の主力品種である。

女峰の土耕栽培

2 らくちんシステム導入

平成8年から省力化などを目的として「らくちん栽培システム」を導入し、開発者である香川大学農学部吉田教授（当時・現岡山大学農学部教授）や、らくちんシステムの先進地であ



先進地から指導員を招いて研修

る三木町地区のJA営農指導員森本氏を招いて研修し、補助事業を活用するなどらくちん栽培への転換を推進した。

3 総合的病害虫管理(以下IPMとする)の導入
平成13年に省力化と害虫の薬剤抵抗性獲得の回避のため、ハダニの天敵であるカブリダニによる技術実証の展示を開始した。この結果、効果が確認され、その技術が確立されたため、平成16年には他地区に先駆けて全戸でハダニ天敵放飼技術の導入が始まった。

また、防虫ネットや反射資材の導入などの物理的防除、被害株の持ち出しや換気によるハウス内環境制御などの耕種的防除を組み合わせ、天敵だけにとどまらないIPMの取り組みも行っている。

4 若手グループの発足

平成20年に20～30代の8名で若手グループ「莓一会」を発足させた。このグループは販促活動や部会員のビニールの張り替えなどを請け負うほか、部会員が何らかの事情で作業ができない場合の作業支援を行うなどの活動を行っている。



若手グループ「莓一会」

● 普及指導活動の成果

1 事業活用によるIPMの普及

平成17年から食の安全・安心確保交付金事業を活用し、IPMの普及を図った。

また、IPMの導入状況について、毎年アンケートを行い、個別指導に活用している。

2 加工用イチゴの出荷による有利販売

平成24年から、加工用イチゴの出荷も行っている。土庄町の社会福祉法人ひまわり福祉会や、高松市の手作りアイスクリームを手掛けるOTTIMOに出荷し、ジャムやアイスクリームなどの原料となっている。これらは、通常の出荷では単価が安い規格のものを有利販売できない

かと検討し販路開拓したもので、比較的高単価で販売することができ、生産者の収益向上につながった。



ハダニ天敵放飼の様子

3 インターネットによる情報発信

若手グループ莓一会では、発足と同時に部会のホームページを立ち上げ、ブログも運営している。このほか、現在ではツイッターやフェイスブックも活用し、小豆島のイチゴの魅力について情報発信も行っている。

4 新品種「よつぼし」の試験栽培

平成24年から、新品種「よつぼし」の試験栽培を開始している。「よつぼし」は、国や香川県、三重県、千葉県の共同研究により開発された品種である。四季成り性で種子繁殖が可能な品種で、育苗の省力化が期待される。当部会では、26年度までは数百株程度を数戸の生産者で試作していたが、平成27年には7aのほ場で栽培を行い、市場性も含めた検討を行っている。

● 今後の普及指導活動の課題

比較的平均年齢の若い当部会ではあるが、それでも後継者不足に悩む高齢者もおり、現在の状況では将来的な栽培面積の減少は避けられないと思われる。若手グループによる作業支援など部会員相互の互助意識により高齢者等の負担軽減が図られているが、就農希望者への経営継承事業やJAインターン制度の活用・誘導などの支援が必要である。

また、「女峰」にこだわり、高品質なイチゴを生産することで「小豆島のいちご」ブランドを確立してきたが、全国的に品種の転換が行われてきている中、ブランド力の維持・発展のため、また生産者の負担軽減と収益向上に向けて「よつぼし」をはじめとする新しい品種への転換も検討したい。